



春よ、恋



瑞椿

——ただただ白い空間を、ひらひらと舞う薄桃の。

「明日にはもう三月なんだねえ」

ふと聞こえてきた呟き。そういえばそうだ。日程通りの計画を遂行しているはずなのに、日付の感覚がてんでなかった。毎年恒例年度末行事は大人たちの命令に従って動けばいいだけなので、僕自身が知ろうとしていないからしょうがない。

三月、暦の上では春。春と言えば真っ先に思いついてしまうのは桜だ。日本人なら誰もが知る、我が国の国花。明日に迫る卒業式や、そうでなければ入学式頃に咲いてくれるのが演出として最高である。のだが、それらには間に合わないというのが僕の住んでいる地域での実態だった。だいたい五月の初めに散り始める花は、部活の新入生歓迎の名目で花見というイベントに活用するしかない。なんとも中途半端なタイミング。

しかしながら未来の自然環境に文句を言うほど僕は面白い人種ではない。一つ息を吐いて、指先の冷えきった手袋もつけていない手をコートに突っ込んだ。

高等学校生第二学年。在学生最高学年になる僕らは、ただいま卒業式の微々たる準備に駆り出されている。とはいえ、一番の大仕事であろう校内の大掃除は数時間前に全校生徒の手で終了していた。残るは式場の設営と、教室並びに廊下や玄関の飾りつけだ。体力の有り余る男子の多くは設営の方に駆り出されているのだが、あまりに人数が多すぎて邪魔なため、少数の非力男子は女子とともに装飾係に回される。

残念ながら僕は装飾係の方だった。確かに幽霊部員同然な美術部所属のモヤシに体力も純粋な力もないのだろうけど、正直この仕事の方が疲れる。

設営は紅白幕やピアノなどの準備など、とりわけ一番多い仕事は卒業生と保護者、お偉い様方が座るパイプ椅子の配置だ。几帳面で細々と文句をつけてくる先生もいるが、人数がいるのでわりとすぐに終わる。そして形になればそこで解散なのだから、ひどく楽なものだ。

対してこちらはといえば、割合の問題で主導権は当然女子にあるし、細々とした雑用や時々ある力仕事を全部男子に振ってくる。しかも彼女たちの派手な凝り性がここぞとばかりに発揮されて作業は長く、文句なんて言えば四方から非難の視線が向くこと間違いなしだ。また、ほとんど立ち仕事なうえ移動も多いから、たとえ教室の担当になろうとドアは全開で暖房の恩恵に与える見込みもない。

純粋に肉体労働の設営と違って、どちらかといえば精神的な意味での疲れなのだ。

「——……さみい」

もぞもぞと縮こまりながら、あごを机にのせる。

と、まあ散々内心で文句を言っておきながら、実のところ僕の扱いは他の男子のそれより優しかったりする。その理由の一つに、昨日体調を崩して学校を休んだことが挙げられるだろう。ほとんど四十度近い高熱を出したことで、普段からあまり健康体とは言えない僕に対する保護欲でも湧いたのか。コートとマフラーの装備を厳命され、椅子に座って足りなくなるかもしれない紙の花を目下制作中である。

この際だからはっきり言おう、楽だ。しかし、だからこそ、辛い。

確かにいまだ肌寒く感じる部分はあるのだが何よりも辛いのは、眠気だ。簡単で単調な仕事に集中力は働いてくれず、冷えすぎてかじかんだ指先をポケットの中で温めている今。襲ってくる眠気に必死に対抗してみるが、どうにも敗色濃厚である。無駄なことを考えようにも思考に霧がかかりはじめ、幾度となく落ちてくる瞼。もうすっかり寝る準備のできてしまった僕は、抵抗を諦め身体力を抜いた。

ひらり、ふわり。

立ちすくむ僕の視界を、紙ふぶきのように落ちるそれがかすめた。機械的に手を差し出すと、手のひらに乗ったのは案の定薄く色付いた桜の花びら。どこからでもなく降り、足元で静止する。果ても見えないただ白いだけの世界の先を見透かすように視線をあげて、花びらが乗ったままの右手を握った。

(ああ、そんな時期だよな) 口の中で呟いて、笑みを作る。

これは、夢だ。この時期になると見る夢。それも、三日に一度くらいの割合で繰り返し。物心ついたころからそうなので飽きてきた感じがしなくないのだが、それでも意外と楽しみだったりする。だって、うまく言葉で表せないけど、綺麗だから。綺麗で、幻想的で。男の俺でも何度見たって素直に感動できるくらい、温かくて優しい光景だ。

けど、一つだけ確かに困ることがある。思い通りに身体が動いてくれないのだ。普通、夢と認識できる夢——明晰夢、と言うのだっただろうか——は、自由に、それこそ空を飛んでみたり壁抜けしたりさまざま動けるものらしい。でも、僕の場合はまったくの逆だった。

動かない。正確にはまったくの静止状態ではなく、無意識化の呼吸やまばたきといったような動きはできているのだが。それ以外の僕の意識で行う行動が全て反映されてくれないのだ。桜の花を掴んだ僕の右手は、そう動くようプログラミングされた、この夢の始まりの儀式みたいなもの。この夢でたった一つの動作だった。

無味無臭、不気味なまでに静かで、おそらく触覚もないのだろう。何でもなく思う考えと、変わらないようでも変わっていく視界が、僕を夢の中に存在させた。

意味もなく眼球を巡らせ、出来る範囲で辺りを見渡す。相も変わらず世界は白と、ほのかな桃色で埋め尽くされている。そこに僕以外の人影はなくて、桜の花びら以外の物体もない。僕はいつものように、この場所で立ち尽くした。時間の経過もあやふやなまま、絶えず流れる景色を眺める。そうして、いつか目覚めるのを待つのだ。

ひらり、ふわり。満開でもこうはいかないだろう見事な桜吹雪。不規則に飛んでいるように見えてその実規則的な落下は、地面を覆うよう折り重なっていく。そうして一枚も僕の身体に引っかかることはなく、全て足元に敷き詰められる。

何度も繰り返し見たせいで、この夢の終わりを僕は知っていた。何回にも分けて見る何もない世界は、次第に桜色で埋められていくのだ。もちろんそこに突っ立っている僕も例外ではない。最初は見えていた骨と皮ばかりの頼りない足から、どんどん桜に浸食されて。膝も腰も隠されていく。指の先まで届く桜に、夢の始まる儀式が形式すらなくなる。腹も胸も、身動きすらできないほどに——どっちにしろ動けないのだが——積もる。そして最後には視線を超えて……頭のとっぺんまで埋まってしまうのだ。それが無意味に続く夢の終わりで、くしくも翌日に現実の桜が満開になるものだから、花見の予定立てに役立っている。

しかし最終的には全身が埋まるとはいえ、さすがに今季初の夢でそう桜は溜まらない。なんとか足の爪に届くくらいのもので、いまだまばらに白が見えている。

暇だ。そんな単語が浮かんだのは罪じゃないと僕は思う。いくら綺麗で幻想的でも、あまり変わりようがないものをずっと見ているのは飽きるのだ。いつもなら、そう長く経たないうちに目が覚めるのに。

それにしても、夢の中でさえできないことがないなんて、どんな皮肉だろうか。自嘲に口元を歪めると、不意に。黒いものが視界に映った。一拍置いて理解したそれは、だらしなく伸ばした僕の髪の色。ぶわりと広がった寒さに、ああ感覚はあったのか、とどこかずれた感想を抱く。夢の中初めての体験に頭がついていなくて、思わず発動した現実逃避——いや、もともと現実ではないのであるが——から帰ってくると。

突如吹いた風と共に、体が動くようになったことに気づいた。

「あ、れ？」

立っていることを意識していなかったからかバランスを崩して、たたらを踏む。くしゃりと花びらを踏みつぶす音と、自分の口から洩れた声が聞こえた。改めてしっかりとその場に立ち、上げた視線に映り込む人影。

「……くん、咲良くん！」

夢の中で突然意識を失ったかのように、唐突に目が覚めた。あまり好きではないファーストネームが徐々に耳になじんできて、体をゆすられていることに気づく。

「……名前、言わないで」

振り返ってみれば、学期初めの席替えで隣だった女の子がそこに立っていた。肩の辺りで揃えられたふわふわのくせ毛と、くりくりよく動く真っ黒な目が印象的だった子。様子を窺うように覗き込んできた彼女は、僕のセリフに少し眉尻を下げる。

「サクラ、嫌い？」

声の調子もどことなくさみしげで、なぜかチクリと胸を刺す。そんなよく分からない罪悪感を誤魔化そうと、質問に答えようとして。その単語がどちらの意味をさしたのか分からず彼女を見返す。

瞬間、――脳裏を走る夢の最後。

「……嫌い、じゃない」

気付いたら僕の口は勝手にそう答えていて、とたん輝いた彼女の笑顔にもう何でもいいかと息を吐いた。

春よ、恋

<http://p.booklog.jp/book/64697>

著者：瑞椿

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/miztsubaki7102/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/64697>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/64697>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ